

---

# 鈍痛

谷口 渡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈍痛

### 【Nコード】

N9749U

### 【作者名】

谷口 渡

### 【あらすじ】

僕はどうなってしまうんだ

僕はいじめられていた、我が身に降りかかる火の粉をしのぎ切れるのだろうか？

## 皮肉な日常茶飯事

頬に裂かれたような痛みが走る、「痛っ、」  
僕は目を覚ました。

蒸し暑い部屋の中、『独り』頬に手を当てる。 激痛 、 「ひっ  
！」

ふと横を見ると扇風機が蒸し暑い風を送っている、この暑いのに僕は窓を閉め切っていた。

ベットの上の時計に目を向ける。 <7:30> 小さいころに祖父に買ってもらった電波時計だ、当時はこのデジタル表示が気に入って買ったことを今でも鮮明に覚えている、買ってもらった箱の匂いもわずかに思い出せる。 どうしてだろう、こんなどうでもいいことなのに覚えている。 どうでもいい？ 死んだ祖父の思い出の品なのに？ まあ今はどうでもいいだろう。

この頬の傷の理由は覚えている、鮮明に、そのときに浴びた罵声も「ハハハッ！ このオカマ野郎の奴今日も学校来てるぜ。マジで『死ねばいいのに』」

校門をくぐって5分、もうかよ、毎日毎日早いな。

「キモー、近づかないで！」

お前に近づくために玄関に入ったわけではない。

「学校くんじゃねーよ、『死ね』」

死にてえよ、こんな人生なら。

だけど死ねない。 怖いから。 痛いのが嫌だから。

将来に希望を愚かにも持ってしまったから。

ああ、辛い、痛い、怖い、憎い、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ、こんなの。

分かっている、自分次第でこんな状況どうとでもなることも、一瞬だけ我慢すればいい、

いいか？ 一瞬だ、それで楽になれるんだ。  
毎朝こんなことを声に出さずに頭の中で繰り返して何日になる？  
ずっとだ。

僕は中学生の頃からいじめられていた、その中学は名門校で入学が決まった時に親が喜んだもんだ。僕はなんとIQ140もあるらしい、自分でも驚きだ、小学校では努力のどの字もしなかった、当然、いや、必然。僕の知能がほかの奴らを遙かに上回っていたからだ。小学校5年くらいだろうか、ほかの人間たちが段々僕に嫉妬の目を向けるようになってきた、そのころから僕は独りだった。ぼくは自分の才能が憎くてたまらなかった、よく布団の中にもぐって独り泣いたつけ、親も親で何も気にかけてはくれなかった、どうにかなるかとも思っていたのだろうか？  
そのころから僕は人と目を合わせられなくなっていた、人が信じられなくなっていたのだ。

僕は今高校一年生だが同じ中学の奴がいたおかげで瞬く間に僕の中学での評判は学校中に広まり、中学校とはいして変わらない位置づけに僕はいた。

今僕は高校の教室前の廊下を歩いている、罵声を浴びながら。

教師どもは知らんぷりをしている、お決まりだ、誰だって面倒ごとは御免だ。

教室に入る、罵声、飛んでくる消しゴムが顔に当たった、めがねが落ちた。

「ヒヤハハハ！ ヒットオ！」

無心。それだけを頼りにしていた。

弁当は誰もいない屋上でいつも独りで食べていた。

そして家に帰る、それが僕の日常、それが僕のすべて、IQ140を誇る僕のすべて。それだけだ。

家に帰ると母が夕飯を作っていた、僕には下に妹がいる兄弟はそれだけ、父はサラリーマンで仕事について聞いたことは無い、祖母は3年前に他界している。祖父は母の実家に一人で暮らしている、父の親についてはあまり聞いた事はない、母や父に聞くとそろってお茶を濁してしまう。

僕の今の今までの立場については家族は知らない、相談なんかしたくなかった。僕の巨大な触ればすぐに砕け散るプライドがそれを邪魔していた。いじめられている時点でプライドもへったくれも無いかもしれないが・・・

その日も早く寝た。やる事が無いからだ、理由はそれだけ、いじめももう布団の上で泣くこともなくなっていた。

時計に目を向ける、<8:00> 一日に半日近くも寝れる、余裕のある生活だ。もちろん僕の僕に対する皮肉である。僕の中にもう独り僕がいるとすればそいつは何を思っているんだろうか？

次の日学校に行くと校門の前で三年生の先輩4、5人に囲まれた。

僕を罵っている、その後ろに昨日僕に消しゴムを当てた一年の田中洋介の先輩にこびる様な姿があった。

「おいテメエ」

三年の先輩が言った、名札には川下と描いてある。

「今日の放課後に体育館裏に来いや、そのまま帰ったらぶっ殺すからな」

なんてお決まりの展開だ。でもこんなことを言われたのは初めてだった。

もちろん行かない。バカか、行くわけないだろう。

でも黙って頷く自分がいた。  
この朝の絡みはこれで解散となった。

そして放課後、朝の声が不意に蘇る。

「今日の放課後に体育館裏に来いや、そのまま帰ったらぶっ殺すかならな」

・・・だから行かないって。 自分に言い聞かせた

「そのまま帰ったらぶっ殺すからな」 心配だ。

僕が通学している高校を選んだ理由は簡単、家が近かったからだ。  
歩いて10分、自転車で5分くらいか、・・・計ったわけでもないけど。

その日はまっすぐ家に帰らず夜の公園のベンチに腰をかけていた、  
かれこれ座り続けて2時間くらい経った、暗くなった公園の電灯が  
つく。 何も考えていなかった、何も考えたくなかった。

家に帰りたくなかった。 もう自分を偽るのに嫌気が差していた、  
教室で皮肉をいったもう独りの自分がいたのかもしれない。

のどが渴いたな、自販機はすぐ隣にある、僕はコインを入れて炭酸  
飲料の下のボタンを押す。

希望のジュースが出てくる、その刹那「なんであいつ来なかったん  
だよ！田中！」

川下の声がする。

僕の言葉が口から自然に漏れる

「冗談だろ・・・」

## 皮肉な日常茶飯事（後書き）

まず、最後まで読んでくださった方、本当にありがとうございます。  
た。

下手糞な文章ですが、どうかよろしくお願いします。

## 狂ったの臆病者（前書き）

多少グロテスクな描写を含んでいます。  
嫌な方はブラウザの戻るボタンをおしてください。

## 狂ったの臆病者

「冗談だろ・・・」

僕は全速力で走り出した、だが奴ら（朝の5人に田中ことだ）は自宅の方向にいる。

僕は皮肉にも逆方向に駆け出した。

気づく、もう遅い。

心の中でもう一人の自分が問いかけてくる。

「なにやってんだあ？ 走ったりしたら気づかれるに決まってんだろ、なあIQ140の天才さんよお！ なあなあなあなあ！」  
僕が僕に言い返す。

「考える、落ち着け、速さ、体力、叶うはずがない！どうする！」  
いかつい声が聞こえる。

「あいつだ！ぶっ殺す！」

おそらくあの3年生の中のリーダー格の川下の声だろう。  
僕のいない体育館裏で随分と待ちぼうけしていたようだ、怒り狂っている。

とにかく今は逃げるんだ！

もう一人の自分が僕に皮肉なアドバイスをする。

「おいおい逃げてるままでいいのかわ？ 追いつかれるに決まってるぞ！」

そうだ、その通りだ、どうすればいいんだ！・・・僕は教えてくれない、僕が僕を救うんだ！僕を救えるのは今は僕だけだ！

6人で集団で追ってくるリンチにされたらたまったもんじゃない、いずれ追いつかれる。

一番体格のいい川下が頭ひとつ抜けている、速い、もう振り返る余裕が無い。

ああ、くそ！何でうちの近くには交番が無いんだ！

この役に立たない傍観者共め！僕が何度も助けを求めたのにカーテンを少し開けて見てるだけだ！

自分でどうにかするしかない！今この場で頼れるのは自分だけ！

川下が他の奴らを10Mほど離して追ってくる。

僕は逃げる中思った、もう失うものは無い、肉体に対する痛みなんて我慢しよう。

迎え撃とう。やるしかない

殺やなきや、殺やれる。

必然。

僕はなんて幸運なんだ、近所の資材置き場に転がっていた鉄パイプを夢中で一本拾った、無防備な人間を殴れば一撃で瀕死にできるだろう。

その鉄パイプの冷えた冷たさがその硬さを物語っていた。

正面から向き合ってたって勝てるわけが無い。

ならどうする！そう、無防備な相手に叩き込むしかない！

僕は曲がり角をまがり急停止した、ここなら相手にとって死角になる、そこに叩き込もう。

僕は鉄パイプを強く握り締める。

あと5秒としないうちに相手はこの曲がり角にたどり着くだろう。

「さあ考える！IQ140！」もう一人の僕は協力的だった。

「どこを狙う！？ 頭？ 腹？ 足？ さあどこだ！ 頭を殴ればどうなる？おそらく顔面にあたるだろう、奴はもつとタフなはずだ！鼻血が出たで終わるだろう、ならば足？腹？

頭よりダメじゃないか！」

「思い出せ！人の急所を、簡単に敵を破壊して殺せる位の所を！」

「首の後ろ！たしか神経の塊があった！それが何かは考える必要はない！脊髄にモロ通じるそこを叩け！」

曲がり角で急停止してからこの結論にたどり着くまで約2秒。驚異的だった。僕は生まれて初めて自分をすごいと思った。喜びが口からあふれる。

「140!!!!!!」

川下が角から飛び出す、急に現れた僕に一瞬怖気づく。僕は思考を停止していた、あとは本能のあるがままに。

ゴスツ！

何かを叩きつぶしたような音や感触が鉄パイプを伝い僕の手に流れる。

川下が声にならない声を上げる。

「あ・・・ああ・・・あ・・・」

川下は殴られ中腰になって殴ろうとした手が力を抜いたようにブロンと音を立てずに川下の肩にぶら下がる。

僕はその後再び川下の顔面を思い切り鉄パイプで殴った。

交わしたの前歯が2本中を舞う。

もう一撃！

グシャ！

川下の鼻が潰れる。

こんなに血が出るものなんだろうか？

僕の制服に返り血が付く。

そのあと何度も殴った、電車にでも轢かれたような顔になった川下をもう一撃！

しようと思っただけの声が聞こえた、かなりビビっている声だ、誰がそんなに怖いんだい？

と振り向くと川下のつれが腰から崩れ落ちて言った。

「ありえねえよ・・・く・・・くるってやがる・・・」  
僕と目があつと「ヒッ!」といって逃げ出す。

田中と僕が目をあわす。 田中が思ったことを、事実をそのまま口から零す。

「あいつ・・・笑ってやがる」

おいおい、だれが笑っているって？

いつせいに川下を置いて他の奴らが逃げ出す。

だから、誰が笑ってんだよ。 もう一人の僕が囁く。

「てめえだよ。」

・・・は？

僕はカーブミラーを見たそこには汚泥のように汚い笑っている僕の顔があつた。

一瞬にして血の気が引く。

何をしているんだ僕は！

何をしていたんだ僕は！

何をしてしまったんだ僕は！

僕は怖くなつて一目散に駆け出し、帰宅した、すぐに布団にもぐりこんだ、

僕を狂っているといった川下の手下の怯えた目が頭から一晩中離れなかつた。

その日僕は初めて一睡もしなかつた。

## 狂ったの臆病者（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。

書き終えた後もっと展開を練って長い文章にしたほうがいいと自分のレベルの低さを実感しました。

筆者は小学生の頃、いじめを受けていました、内容はどうであれ、いじめでした。

かなりかいつまんで話してすみませんが、ぼくをいじめていた中心的な人物が中学校で逆にいじめに遭い、転校するまで追いやられました。

思春期の僕には衝撃的過ぎました、まず最初に僕をいじめていたあいつは悪いのか？と思いました。

人をいじめて、人にいじめ返されて。

人にいじめ返されたときそいつは可哀想な奴なのか？ 当然の報いなのか？

この答えは依然として出ていません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9749u/>

---

鈍痛

2011年10月9日11時50分発行